

C ま と め

前項では器種ごとの分類と分析を行い、各器種における諸特徴や一般的傾向を明らかにした。ここでは、それらの結果をふまえ、若干の問題点・今後の課題等を記述し、まとめとしたい。

1) 三脚石器の分布・時期・性格について

本遺跡の石器組成のうち特徴的なものに三脚石器と三角形の板状石器¹⁾の大量出土（合計約150点）がある。本稿では従来あまり明確でなかった三脚石器の分布と時期を示し、合わせてその性格について考察する。

三脚石器の分布については過去に集成が行われ（金子1983）、その後の新資料も併せて次第にその時期も明らかになりつつある。三脚石器は、青森・秋田・山形・福島・栃木・新潟・富山の各県に分布し、円筒上層式・大木式土器の分布域とほぼ一致し、類似遺物である三角形土版・三角形岩版とも分布が共通する（第119図）。ただし、三者の前後関係は未だ不明である。

三脚石器はその出現が前期後葉まで遡る可能性も指摘されているが、現在確認されている最古の三脚石器は山形県の大木7a式期のものである（渋谷1986）。次の大木7b式には福島県（高橋ほか1987）・新潟県²⁾に、さらに中期中葉に秋田県・栃木県³⁾へ、後期前葉には青森県に現われる（今井ほか1969）。富山県出土例は後・晩期とされるが（湊ほか1972）詳細は不明である。現時点における確実な存続時期は中期初頭から晩期前葉⁴⁾までである。その分布と時期について要約すると、山形県を中心にして同心円状に伝播したと言えよう。

なお、新潟県への伝播経路については、現時点での新潟県内の分布が山形県と接する新潟県北部（阿賀野川以北）では全く確認されていない。中越地方では山間部でのみ確認され、平野部・海岸部では確認されていないことから、山形県から直接伝播してきたとは考え難く、福島県会津地方を経由して中越地方（信濃川中流域）へ伝播したと考えるのが妥当であろう。

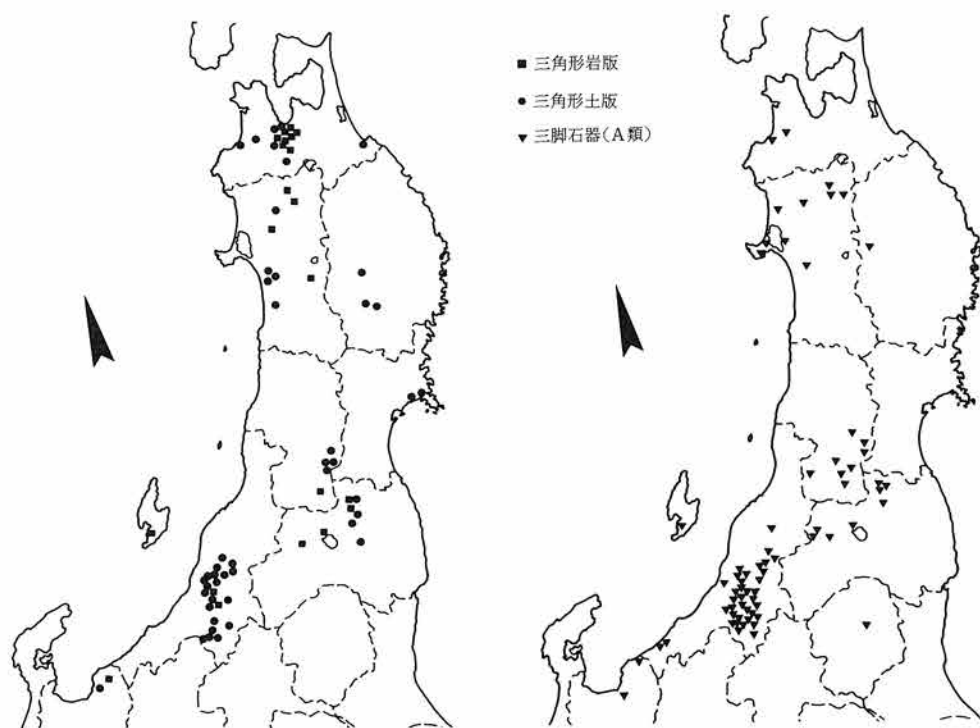
三脚石器の性格については、1遺跡あたりの出土数が少ないことや形状の特異さから類似遺物である三角形土版・三角形岩版と関係づけられて非実用的な石製品と見做されることが多かった（目黒1956・江坂1960）。しかし、本遺跡における出土状況は、その大多数が長方形住居跡をはじめとする住居跡内堆積土から出土し、集落中央のいわゆる広場では見られないという一

1) 三脚石器と三角形の板状石器の定義については、第IV章2項B6)を参照。

2) 新潟県において現在最古の三脚石器と見られるものは本遺跡出土例である。

3) 秋田県男鹿市の大畑台遺跡、栃木県矢板市の坊山遺跡出土例から、遅くとも大木8b式期には秋田県・栃木県に出現していたと見られる。

4) 三脚石器が46点出土している秋田県鷹巣町の藤株遺跡では土坑底面直上出土例に大洞B式の土器に伴う例が1点ある。ただし、その他の45点は全て後期前葉の土器に伴うと見られること。また、後期後半の三脚石器が現在のところ明確でないことから、その消滅する時期を晩期とすることは時期尚早かも知れない。



第119図 三角形土版・三角形岩版・三脚石器(A類)の分布 (原図金子1983一部改変)

般的なあり方を示すこと(第46図)。また本遺跡と西倉遺跡(佐藤1988)出土例では使用痕が確認されることから、実用品であったことは明らかである。本遺跡で認められた使用痕には側縁の擦痕(360・646ほか)と裏面の擦痕(226・635ほか)があり、西倉遺跡出土例では側縁中央に打痕(つぶれ)が認められる。側縁部の擦痕は正裏面方向のものであり用途はスクレイパー的なものと考えられる。ただし、石材は粘板岩・結晶片岩・砂岩など比較的軟質なものとその大部分を占めることや、刃部が鈍いことなどから対象物は限定されよう¹⁾。

今回は使用痕観察により三脚石器が実用に供されたことを明らかにし得たが、これが三脚石器全般に共通するものかどうかなどは、今後の徹底した使用痕観察と新たな発掘資料などを待たなければならない。

1)例えば、「植物から繊維を採るのに用いた刃物」(石倉1950)と見ることも可能である。